

# 出版社を訪ねて

第58回  
『てくり』編集部



『てくり』は盛岡の「ふだん」を継るリトルプレスです。書籍の取り次ぎを通さない流通のため、ご存じない方もいらっしゃるかもしれません。盛岡周辺では書店のほか、雑貨屋さんやカフェなどでも販売されています。

## 盛岡の今

『てくり』の創刊は2005年。といっても、始動はその3年前にさかのぼります。「9年前、私が県外から盛岡に帰ってきたときに、ライターをしていた友人に

「古いものが失われつつある盛岡で、それを形に残して次の世代に伝えていく」とは、変化の激しい目撃者である私たちの世代的役割かもしれません。ふるさとを客観的に見つめることができるからこそ表現できる空気や歴史を、今の自分たちなりに表現して伝えていけたらいいな、と。歳を経たらもっと別の形になっているかもしれないし、『てくり』は、盛岡にある視点から捉えるきっかけに過ぎない。若い人たちには若い人たちの表現方法を見つけてほしいと思っています」

## これからの『てくり』

今後の目標は、続けていくこと。紙媒体としての発行だけでなく、これまでに開催しているブックカフェなどのイベントや、作り手と使い手を結ぶ展示会など、きちんと続けていきたいと思うことはたくさんあります。

「直接販売できる場所があればいいな」という構想も、雑貨店を開きたいと思っていた菊池さんと出会い、「ひめくり」というショップをプロデュースするという形で実現できました。『てくり』は情報や思いを広げていく役割なので、今後はそれ

「盛岡で何かやれたらいいよね」と声をかけられて、「そだね」なんて軽い気持ちでいたんです。そしたらその後すぐ電話がかかってきて、赤坂さんを紹介された時、「あ、本気だ」と……と笑うのは木村さん。

この三人に水野さんほか2名のライターが加わり、「何がしたいか」「何ができるか」について話し合いを重ねていきました。

「みんな一度盛岡の外に出てみるんです。戻ってきて、そのよさを再認識したい。ということも大きいけれど、新しい建物が増え、町並みが変わっていく様子に危機感みたいなものを感じました。以前何が違っていたのかわからなくなるみたい、人の考え方や文化も忘れられていくのかなと思うと、ちゃんと残しておきたいと考えるようになりました」

## 楽しみを形に

木村さんはデザイナー、赤坂さんと水野さんは編集ライターとして、ともにフリーで仕事をしています。それぞれの持つ経験や思い入れから、紙媒体をイメージするのに時間はかかりませんでした。問題となるのが資金です。

「ちょうど、『まちの編集室』として市民団体の広報ツールを制作する機会がありました。その報酬を『てくり』の印刷費にあてて創刊号を発行しました」

その物語を聞く会を開くなど、集約していくような場づくりをしたいですね。そういう活動が、私たちが大切にしていることに共感してくださる人たちの裾野を広げることになればいいなと思っています」

ひめくりには雑貨や手仕事好きな女子はもちろん、「店や雑誌で、盛岡のいい文化を紹介してくれるのがうれしい」というおじいさんがお宝本を見せにきたり、おしゃれな男子がひとりじっくり手仕事の世界に浸ったりしていました。「てくり」の世界に流れているのは、素敵な喫茶店文化があるから外資チェーンのコーヒーショップがはやらぬという、盛岡ならではのからりと澄んだ空気なのかもしれません。

記念すべき創刊号は1000部発行。販売してくれる場所を探すのも、配達するのも全部自分たちでこなしました。売れるかどうかの不安をよそに、なんと約1カ月で完売したそうです。

「売り上げで次の号を作るといいう自転車操業を続けている状態なので、収入源にはほど遠い。地方誌は広告がないと成り立たないのが一般的なんですが、それでは企画の自由度が下がります。同人誌みたいに楽しみながらやっている感じですね」

## 30万人のふだんの物語

てくてくと歩く、てづくりを愛する、そんな想いをこめて名づけられた『てくり』。毎号テーマは異なりますが、盛岡に暮らす約30万人がそれぞれに持っている「物語」をひとつずつ取り上げて、じっくりとあたたかな視線で紹介するという編集姿勢は一貫しています。

「タイトルをそばにも入れています。盛岡の『ふだん』を伝えたい、残したいと考えています。ものや場が生まれる背景には必ず人が関わっています。すると自然にスポットがあたるのが「人のおもしろさ」。たとえば自分が気に入った器を見つけたら、どんな人が作っているのか、気になるものですね。

手仕事を紹介する機会が多いのも、「もの」を通して見えてくる物語がある

から。そこに込められた作り手の思いだけでなく、それが暮らしの中で放つ美しさをも伝える話からは、日常にこそ存在するきらめきが伝わってきます。それを掘り下げるかたちで発行されたのが別冊「Te no te」。『てくり』のスタッフが厳選した、岩手県内16工房での取材がまとめられています。

## 今の私たちが、今伝えられること

当初6人だったメンバーですが、現在『てくり』の編集ライターは赤坂さんと水野さんを含めて4名。木村さんはデザイナー兼アートディレクターとして、すべての取材に立ち会っています。

「ほかの仕事もあるので物理的には大変ですが、現場で話の構成や写真の扱い方が浮かぶこともあり、何よりも実際にお会いしてお話を聞くのが楽しくて、写真へのこだわりは譲れないので、格安で……とお願いしてプロのカメラマンに同行してもらっています」



【ひめくり】店内（奥に菊池さん）



『てくり』に登場するのは芸能人などではありません。盛岡で暮らす、普通の人。だけど、それぞれの生き方や思いをひも解けば、「普通の人」なんて、ひとりもいないんだなと思います。『てくり』を読んで故郷に誇りを持つ人、盛岡という土地にあこがれる人がたくさんいます。

『てくり』の編集室が独断で選んだという若手16カ所の工房には、それを作る人の物語が息づいています。「つくる仕事」を選び、向き合う気持ちで、作品の魅力や伝統工芸としての素晴らしさとして現れているということを知ると、身の回りのものが愛おしくなってくるのです。

## （ジャストワン）①

『てくり別冊 te no te いわ【てのて】しごと craftes&products』  
●掲載番号 331 ●案内番号 009-02  
●ジャストワン番号 TN-341-604  
(本)1冊 ¥1,500 (税込み価格)

●出版社/まちの編集部  
●企画/まちの編集部  
●製本 21cm 94ページ

## （ジャストワン）②

『てくり13号 伝える仕事。』  
『てくり14号 盛岡カルチャーラン』  
●掲載番号 331 ●案内番号 009-01  
●ジャストワン番号 TN-341-594  
(本)2冊 ¥1,000 (税込み価格)

●セット内容/雑誌2冊  
2タイトル共通  
●出版社/まちの編集部  
●企画/まちの編集部  
●製本 24.5cm 40ページ

お申し込み番号がTN/TSで始まる商品(書籍・CD等)は、各種プレゼント・キャンペーンの対象外です。(注文書にCをTに上書きして利用可能です) ジャストワン①マークの商品はご希望の地だけお届けします。月々のお届けではありません。